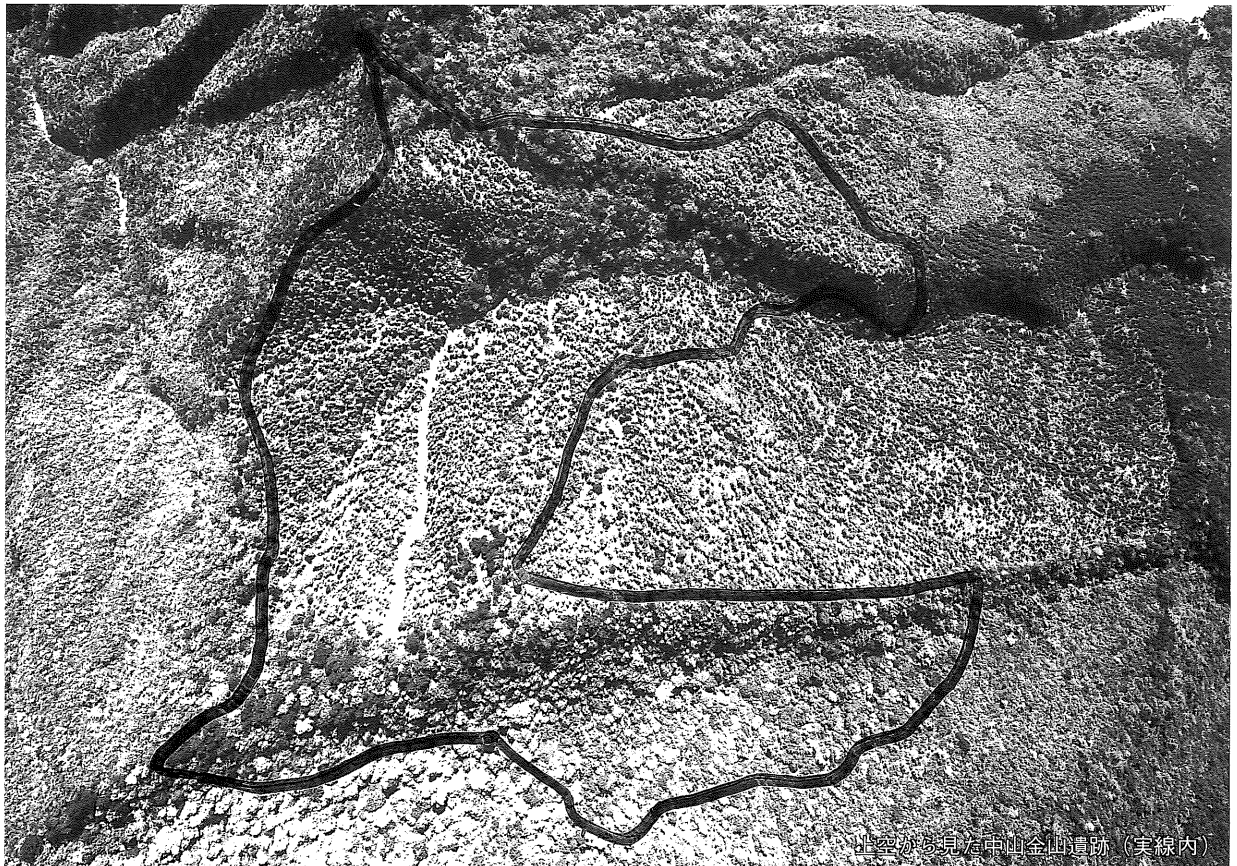


資料館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡 / 湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山資料館報



上空から見た中山金山遺跡（実線内）

中山金山遺跡 国の史跡に指定される

湯之奥金山（中山・内山・茅小屋）遺跡の一つを構成する中山金山遺跡が、塩山市の黒川金山遺跡とともに、去る9月2日付けで文化財保護法の規定に基づき、史跡として国の指定を受けました。

これは、「甲斐金山遺跡—黒川金山・中山金山」という名称で指定されたもので、いずれも戦国時代の大規模な作業場が残存し、山金採取の初源的形態や具体的な産金技術、さらには経営状況が明確に残る貴重な遺跡として、鉱山史的・歴史的・学術的にも価値が高いことが評価されたものです。

昨年10月18日に文化財保護審議会から答申が出された後、文部省において他の省庁との調整などの指定事務を進めていたものが完了したもので、待ち望んでいた町民をはじめ、教育関係者や調査に携わった人々にとり朗報となりました。

今後は、遺跡の保存・保護・活用のための施策を講じるとともに、更なる調査により未だ解明されない事実を明らかにしていく必要があります。

本町での国指定文化財は、門西家住宅（湯之奥）に次いで2件目となりました。（本文2ページ）

国指定史跡

甲斐金山遺跡／中山金山

中山金山遺跡は、静岡県との境をなす毛無山の中腹、標高1400m～1650m付近に広がる大規模な鉱山遺跡で、この金山の開発についての初見史料は、元亀2年（1571）に武田家が発給した朱印状で、この文書に中山の金山衆について記述されています。

採掘の盛期は17世紀の中ごろで、これは門西家所有文書、紀年銘石造物、出土した陶磁器片等からうかがい知ることができ、以後経営形態は次第に領主側の経営から山師の開発へ変わってきていますが、これは金産出量が次第に少なくなってきたからと思われ、門西家所有文書によれば、18世紀初頭には金山衆もこの地を去ったことを知ることができます。

指定面積は16.36haの広大なもので、この区域内に124のテラスが確認されています。金山沢付近の



中山金山遺跡の中心的テラス全景

平坦面域のそれは居住・作業域であり、平坦面域から尾根部に及ぶ地域は鉱石採掘域と大きく捉えることができます。平坦面域の中心域にあたる最も傾斜が緩やかで、大きなテラスが隣接する区域は精錬場と呼ばれ、ここから谷部を東に登った地域には宝篋印塔と板碑型石塔が並ぶ七人塚のほか、五輪塔や石祠などの石造物集中域を形成しています。

テラス各所からは陶磁器類、鉱石粉碎具、金属製品などの遺物が出土しています。

陶磁器類のなかには、織部向付、祖母懐の茶壺、茶入、天目茶碗等も出土し、金山経営者が茶の湯に親しんだことがうかがえ、その生活の実態を考えるうえで大きな意味をもつ資料であります。

鉱石粉碎具は、挽き臼、搗き臼、磨り臼、磨り石

が出土していますが、なかでも特筆すべきは、鉱石供給孔が中心を外れている挽き臼の存在であり、これは他の鉱山遺跡に類をみないものであり、出土遺跡の名称をとり、「湯之奥型」と呼ばれています。

金属製品は銭貨、煙管、鉄釘、把手などが出土していますが、銭貨のほかは完全な形で出土したものはありません。

坑道はテラス群から尾根までの斜面に16箇所が確認され、いずれも石英脈を追いかけるように掘り進んだ錘押し掘り坑道であったと思われます。

このほか露天掘りの遺構が尾根付近を中心に77箇所確認されています。

一方、同時に指定された黒川金山遺跡は、塩山市上萩原の鶏冠山（1710m）の東側山腹にあり、標高1200m～1400m付近に広がる鉱山で、開始の時期は16世紀初頭とみられ、ほどなく全盛期を迎え黒川千軒と呼ばれた大規模な鉱山町も構成され、数十年の繁栄の後16世紀後半から次第に衰退し鉱山町も縮小を続けたものと思われます。

指定面積は70.55haという広大なもので、この区域内に約200のテラスと坑道24箇所が確認され、このほか、鉱石粉碎具、陶磁器、鉄砲玉、銅銭、カンザシ、石仏台座など当時の生活を彷彿させる遺物が出土しています。

特に「黒川型」と呼ばれる特殊な軸痕をもつ挽き臼の出土は、鉱山臼の変遷を想定させるための貴重な存在です。



黒川金山遺跡坑道跡

「学際的」(がくさいてき)調査/考古学から

甲斐黄金村・湯之奥金山資料館 館長 谷口 一夫

資料館だより第1号では「学際的調査」とは?と題し、「学際的調査」の内容と、それぞれの資料がもつ特徴について簡単に紹介させていただきました。

第2号では、具体的に考古学調査が実際にどのように行われ、どのようなことが解ったのか、その内容について触れてみたいと思います。

「過去の事実を知る方法」の一つに考古学があり、考古学という方法で遺構、遺物という物としての形態で残されている資料をもとに、過去起きた歴史事実を明らかにするという作業が行われました。資料は必ずしも表面に出ていませんから、当然発掘という作業が伴います。中山金山遺跡は標高1400m～1650mという場所ですから、通常の遺跡発掘調査とは、全く状況が違いました。発掘機材の運搬、野営地の設営、食材の運搬等、いざ始まるといういろいろなことが起きて参ります。でも中世の戦国時代から操業されていたと思われる金山遺跡へメスを入れるわけですから、どんな苦勞も吹き飛ばしてしまいます。

最初に石部典生さん(現在下部町議会副議長、湯之奥金山資料館運営委員)の案内で現地へ立った時、正に作業していた金山衆がそっと姿を消した状態、映像シアターでもそんな場面がありますが、人がそ



中山金山遺跡からは瀬戸祖母懐の茶壺の破片が出土した。
写真は館所蔵の同時代16世紀の祖母懐の完形品。

こにいれば、そのまま今でも金の採掘がここで行われているのではないかと思うくらい、そのままの形態が残されている状態にまずは大変驚きました。

内容については、伝承ではいろいろ伝えられていますが、実は何も解っていない状況でした。そこから考古学の調査が始まったわけです。考古学という資料は、同時代資料ですが、何百年か続いた遺跡では、それらの遺構や遺物が重なり合うか、混在しています。ですから、時間軸をまず正しく把握しないと、調査は何をやっているのか曖昧になってしまうわけです。

例えば湯之奥中山金山遺跡では、遺跡の中心を金山沢が流れており、その沢の北側は急傾斜の南向き斜面が上方に200m以上伸びています。その斜面には10数箇所坑道があるんですが、遺跡全体にみられる遺構が伝承的に語られる時、中山の尾根に存在する露天掘坑も、それら坑道も全て時間軸が一つになってしまう危険があります。実際には100年～200年の開きの中に造られた遺構が、ある時期に限定して語られると、正に歴史でなく物語になってしまうわけです。

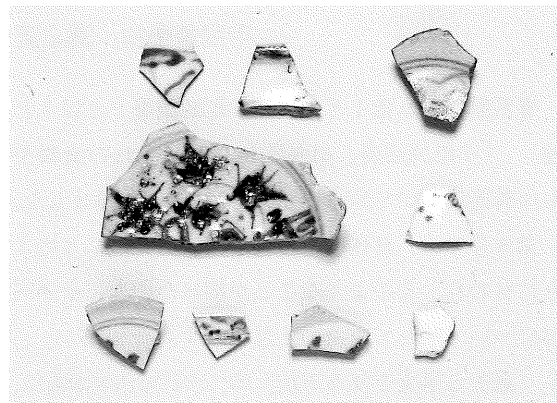
発掘調査では、十分そのようなことの解明に意を注ぎながら、どのような性格の遺跡なのか、残されている遺構の性格は、本当に金山遺跡で金の採掘が行われたのかどうか、操業開始時期の操業形態、操業終了時期の姿、文書に出てくる金山衆と金採掘工程の解明、伝承で伝えられる大名屋敷跡、女郎屋敷跡の確認、などなど同時代資料である現場に残された遺構、遺物、その残され方、内容、分布されている範囲、状態など、緻密に観察し記録に留め解析を進めながら調査しました。平成元年～3年まで毎年7～8月にかけて行われたものです。

発掘調査は当然慎重さが要求されます。よくTVなどで事件現場を警察の鑑識の方が、這いずり回って証拠をみつけ、状態を観察、記録している姿をみますが、正に考古学をやっている訳です。何も語ってくれない現場から何を引き出すか、これなんです。引き出せるものは全て引き出すということです。

さて、湯之奥中山金山が何時の時代の金山遺跡な

のか、文書では元亀2年（1571）に武田信玄から「中山金山衆拾人」に深沢城における戦功に対し粗150俵を与えるという確かな文書資料があるわけですが、その拾人衆の存在が、遺跡のなかで確認できるのかどうか。ではその時代1571年頃を特定できる遺物資料は存在するのかどうか。考古学では、時代を推定するのに、それぞれ個別資料の編年研究が進んでおり、その時間の物差しはどこに当てはまるかで、結構、誤差も少なく時代を確定することができます。この中山では、中国明時代の陶磁器や瀬戸美濃の焼物の存在が、16世紀中葉には人の存在があったことを、また瀬戸の祖母懐の茶壺や天目茶碗の存

在が、ある程度身分のある、あるいは生活レベルの高い人の存在を明らかにしました。（つづく）



出土した明時代の中国陶磁器片。

活動報告 公開講座

10月から資料館主催事業として公開講座が始まりました。第1回目の講座は、10月4日（土）に信州大学教授 笹本正治先生を講師に迎え、テーマを「武田氏と金山—古文書からみた金山衆」とし戦国時代に栄えた湯之奥金山を、数少ない古文書を通じて、様々な角度から読み解くという視点から講義してくださいました。

テーマを「武田氏と金山との関係」「武田氏時代の金山衆の実態」「湯之奥金山と武田氏」という3つに分け、過去の文献を引合いにしながら順を追って、自身の見解を述べられました。

また、第2回目の公開講座は11月8日（土）に開講され、山梨学院大学教授 十菱駿武先生が講義し

てくださいました。先生の講義テーマは「日本鉱山史上の湯之奥金山」。まず、金とはどういうものか、どういう地質に存在するかを導入部とし、鉱山用具の比較、鉱山技術の変遷、各金・銀山の特徴、さらには、湯之奥金山の学際的調査が、佐渡金山、石見銀山などの他の鉱山の開発の基盤となった金山衆の技術が解明され、日本鉱山史・中世近世史研究の上で果たしている意義などについて語られました。

この公開講座は来年の3月まで続き、月に1度のペースで開講します。第3回以降は次の日程で開講します。その他詳しい情報は資料館までお問い合わせください。

戦国の金山を語る — 湯之奥から日本を考える —

回	期 日	演 題	講 師 名
第3回	12月7日(日)	湯之奥金山と鉱山技術	帝京大学山梨文化財研究所 研究部長 萩原三雄
第4回	平成10年 1月17日(土)	金山衆の暮らしと信仰	富士吉田市教育委員会 堀内真
第5回	2月8日(日)	武田氏と金山—その2	山梨県教育委員会 堀内亨
第6回	3月8日(日)	今後の金山研究と資料館	帝京大学山梨文化財研究所 所長 谷口一夫 (湯之奥金山資料館・館長)

会 場 湯之奥金山資料館多目的ホール（JR身延線下部温泉駅前）
時 間 午後2時～午後4時
受講料 無料

誌上博物館 — シリーズ その2 — 鉱山用具①

山から採掘した鉱石に含まれている金を採取するためには、これを粉砕して揺り分けなければなりません。砕く、磨る、挽くなどの作業を経て微粉化された鉱石は水を使って比重選鉱を行い金と鉱石の滓とに揺り分けます。

比重選鉱とは、比重の重い金を微粉化された鉱石から産出するときに、比重の軽い鉱石の滓だけを水とともに流し出して取り除く方法のことですが、この作業時に使用されたものが「セリ板」、「フネ」、「ユリ板（盆）」などの鉱山用具です。

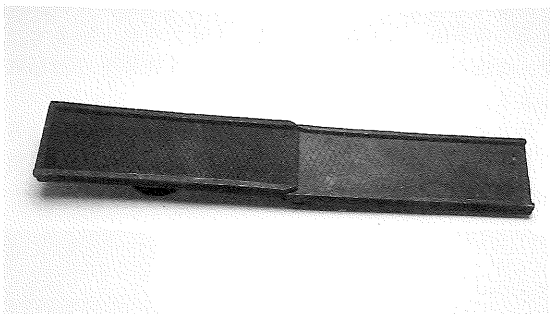
挽き臼によって微粉化された鉱石は、水と混じり泥状になって椀やセリ板の上に運ばれていきます。

斜格子状に刻まれた微妙な角度の鋸目をもつ2枚つなげたセリ板の上を流下していく金粒は、金そのものの比重によって鋸目に留まります。セリ板の格子目中に留まった金粒は、水を湛えた「フネ」と呼ばれる桶の中に洗い落とされます。「フネ」に溜った金粒は、「ユリ板（盆）」と呼ばれる道具で水中で揺らし、他の成分を取り除き金だけを採取します。

現在、日本で確認されている「セリ板」の点数は12点といわれています。そのうち11点は湯之奥金山と深い関わりを持つ門西正勝家から発見されました。

門西正勝家所蔵の「セリ板」は、いずれもその板面上に鋸により斜め格子状に溝が切られ、溝幅は狭いものは0.7mm、広いものは1.3mm、溝の深さは浅いもので1.0mm、深いものは5.0mmあり、幅、深さ、切り込み角度が正確に刻まれています。11枚とも大きさ、厚さが違い、さらに縁付き、縁無し、棧付き、棧無しなど形態に相違があることから、使用方法・目的を異にしていたものと考えられています。

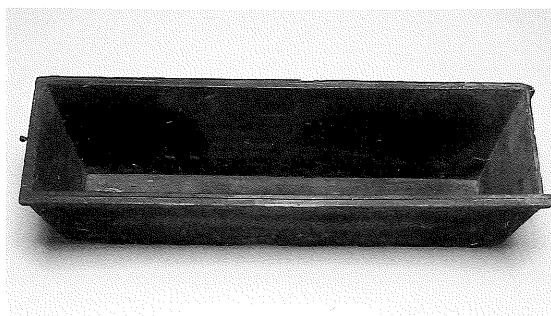
また、「フネ」は岩手県南部金澤金山などの金山



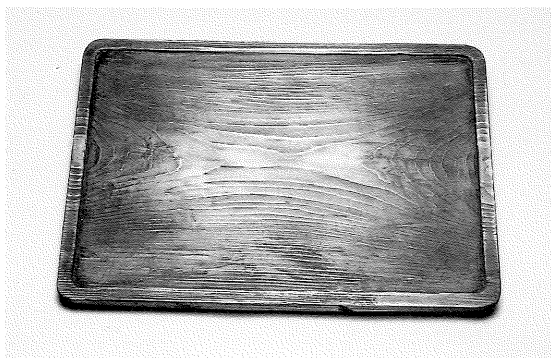
セリ板

絵巻には「前木津（地）」という名で登場する木桶で、門西正勝家では2隻を所蔵していますが、大きさ、縁の有無、形状、深さ、側板の角度ともに異なっています。

使用方法は、①セリ板の鋸目に溜った金の洗い出し、②セリ板を揺すり、金を揺り分ける、③水または粉鉱の混じった水を溜める、ことなどと推測されますが、現存する資料はその大きさから、鉱石を石臼で細かく粉砕する際に、供給孔から注ぐ水と粉砕



フネ



ユリ板

する鉱石等を溜めておいた道具と思われる。

これらは、門西家が重要文化財に指定され、昭和44年に解体修理を施した際に天井裏から発見されたものですが、この存在が確認されたことは、金山の存在が実証されたと同時に、金山における粉成作業の内容をも具現化する重要な資料です。

400有余年の歴史が刻み込まれたセリ板とフネは、現在、下部町の文化財に指定されていますが、貴重な考古資料であるため、早期に県や国レベルでの文化財指定が望まれています。

このコーナーは、当館の展示資料のほか、金と鉱山に関する情報をシリーズで掲載していきます。

施設の御案内 — その2 —

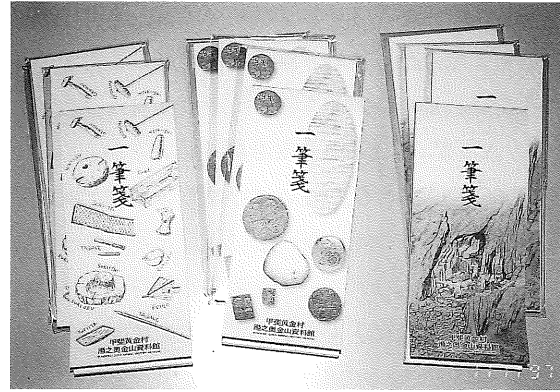
ミュージアムショップ①

2階の展示スペースで中世・戦国期金山の世界にじっくり浸り、1階の砂金採り体験室で人々を魅きつける黄金を手にした後は、ミュージアムショップへどうぞ。売場面積34㎡のこじんまりした販売スペースに似合わぬ豊富な品揃え。菓子類、飴、漬物などが所狭しと並んでいます、なかでも金山資料館ならではの金関係の商品は一際目を引きまします。

ネックレス、ブローチ、置物などのほか、金箔テレカ、金箔カレンダー、金箔入りコーヒーなど金を用いた商品が目白押し。特に金箔入り椎茸茶は当資料館で一番の売れ筋を誇っています。そして、数あるオリジナルグッズのなかでお勧めしたいのが「一筆箋」。伝えたいことがあるのに、手紙を書くのがちょっと苦手という人にお勧めです。鉱山用具、甲

州露一両金、鉱脈を採掘している様子を描いたものの3種類が用意してあります。ふと思いついたことや、アイデアを書き留めるのにもいつも手元があればとても便利です。

日常生活に「一筆箋」を活用してみたいはかがでしようか。



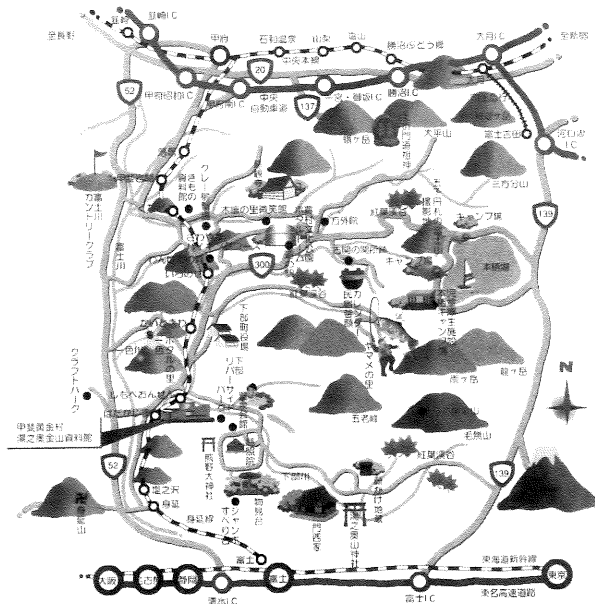
利用のご案内

◆開館時間	5月～10月 9:00→18:00 (受付は17:30迄)
	11月～4月 9:00→17:00 (受付は16:30迄)
◆休館日	水曜日 (祝日の場合はその翌日)
	12月28日～翌年1月1日
◆入館料	大人 中学生 小学生 幼児
展示観覧	500円 400円 300円 無料
砂金採り体験	600円 500円 400円 400円
観覧・体験共通	1000円 800円 600円 400円

●20人以上の団体は10%引です。

交通のご案内

- ◆自動車をご利用の場合
 - 中央自動車道 甲府南 I.C. から50分
河口湖 I.C. から50分
 - 東名高速道路 富士 I.C. から110分
清水 I.C. から130分
- ◆電車をご利用の場合
 - 新宿駅・特急90分→甲府駅・身延線特急40分→下部温泉駅
 - 富士駅・身延線特急60分→下部温泉駅



編集後記

最近、「又来ましたよ。」というお客様が増えてきました。2回、3回……と入館していただけるような施設づくりこそが、館に携わる者の願いと課題。

愛される資料館を目指し、これからも頑張りますのでよろしく御指導ください。

資料館のロビーに美しい菊の懸崖が2鉢飾られ芳香を

放っています。これは依田良平さん(常業)から寄贈していただいたもので、戸外で花を目にすることが少なくなるこの季節、入館者の目を楽ませてください。そんな温かいニュースとともに館だより第2号をお届けします。

年末は12月27日まで開館しています。また、新年は1月2日から開館しますので、古里に帰省された方々に資料館をご紹介します。

資料館だより

第2号
平成9年11月25日

発行 甲斐黄金村・湯之奥金山資料館
山梨県西八代郡下部町上之平1787番地先
TEL 0556 (36) 0015